

「大学改革」による旧東ドイツ社会科学者のキャリア転換と適応の過程

——ベルリン・フンボルト大学における事例研究——

東京大学 飯島幸子

1 目的

1990年10月3日の「ドイツ統一」は事実上、旧東独の旧西独への併合であり、東側社会システムは諸相で西側システムへの適応的転換を迫られた。「ドイツ統一」という社会変動は社会史レベルに止まらず、職業集団や個人史レベルにおいても実に多彩な経験を創出した。例えば旧東ドイツ(DDR)の大学・学界領域では、1990年代初頭より各地で「大学改革(Universitätsreform)」の名の下にドラスティックな構造変換が断行され、それにより多くの大学研究者がキャリアの断絶あるいは何らかの転換を迫られた。本研究は、収集したDDR社会科学者のライフ・ヒストリー計42件を主要な分析資料とし、T. ハレーブンの研究(Hareven, 1982=[1990] 2001)をはじめとした多元的歴史の観点より、生きられた歴史の多相性に関して論じるものである。今回の報告では、「大学改革」後の時期(第三期)に着目し、対象者たちの職業キャリアの変化と適応の過程を考察する。

2 方法

本研究では、「ドイツ統一」時点で(1990/91年冬学期)ベルリン・フンボルト大学(Humboldt-Universität zu Berlin)の社会科学系2部局(社会学研究科および社会科学・政治学専攻)に在籍した研究者を対象に学術・職業上のライフ・ヒストリーを聞き取り調査した。対象者のライフ・ヒストリーは大きく3つに時期区分され、第一期ではDDR時代の大学における緩やかな変化を伴う時間軸である位相概念「大学時間」を導入し、「同時期に同じ大学で働く社会学者」という共通項を持つ対象者らの経験へ集合的理解を試みた。他方、第二期では「大学改革」のプロセスが問題となり、そして「大学改革」以後の第三期は各人の進路に多様な分化が見受けられた。

3 結果

「大学改革」とはDDR時代に流れていた「大学時間」の終焉であり、西側システムへの不可避の適応を伴った大学組織および集団の再編と解体を意味していた。「大学改革」後、即ち、大学で働く社会学者という集団の共通性を失って後、ある者は研究職キャリアを継続し、ある者は他分野の職種へ転換するなど、対象者らのキャリアは多岐に分化した。そこで、分岐点における彼らの適応の過程と戦略を類型化し、事例分析した。

4 結論

適応に関する5類型では、該当者の属性分析や類型ごとの事例検討を通して各グループの特徴を示す一方、同じ類型でも、対象者の主体的な意味づけの方向性により更に多様なヴァリエーションが存在することが分かった。「ドイツ統一」という社会変動に関する歴史の諸相がそれぞれに出会うタイミング、そのダイナミズムに着目するとともに、これら複層的な時間位相のタイミングによる作用が類型ごとに如何なる差違と特徴を与えるか考察された。

文献

Hareven, Tamara K., 1982, *Family Time and Industrial Time: the Relationship between the Family and Work in a New England Industrial Community*, Cambridge; New York: Cambridge University Press. (= [1990] 2001, 正岡寛司監訳『家族時間と産業時間 [新装版]』早稲田大学出版部。)